

直径 10cm を越すフェアリーリング

湯本 洵子

立川から国分寺を通り世田谷区の等々力まで続く崖は国分寺崖線と呼ばれています。崖線斜面には多くの湧き水があり木々が茂り、たくさんの動植物が見られます。多摩川が長い長い時をかけて作り上げた緑の帯ですが、最近ではあちこち開発され、少々心細くなっています。

この崖線の一角、小田急線・成城学園前と喜多見の間に「成城みつ池緑地」があります。ここは、かつて「上神明」と呼ばれた神聖な場所で、ここから湧き出る水が一带の田を潤したのだそうです。今も湧水と森を保ち、東京23区内では目黒の自然教育園のほかはここだけと言われるゲンジボタルの自然発生地でもあります。そのほかにも、都会では珍しくなってしまった昆虫や植物が多く見られる貴重な場所です。「緑地保全指定地区」として保護され、一般の立ち入りは禁止されており、近隣住民を中心とするボランティアが保全活動をしています。必要に応じてアズマネザサなどの下草を刈り、緑地内の動植物を観察・記録しています。

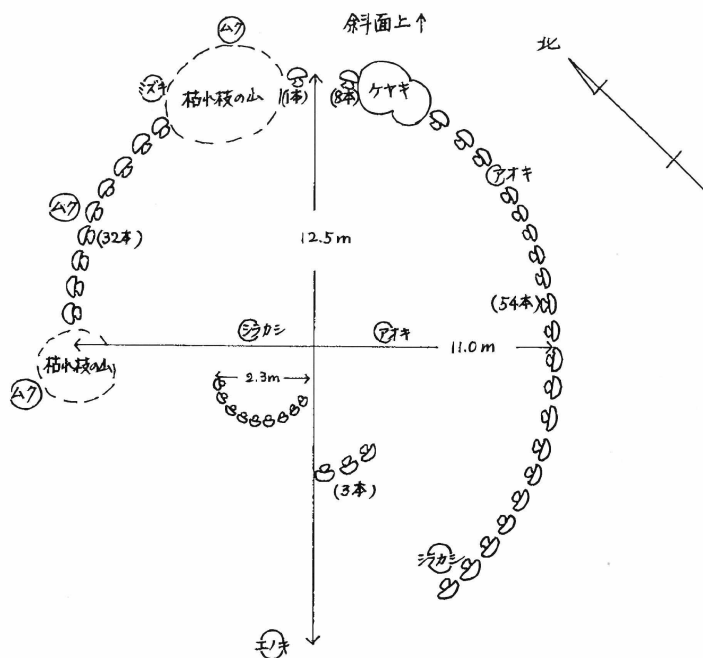
100本ものキノコがはえてます

11月13日の保全活動日のこと、この緑地内のゆるやかな南西向き斜面にキノコの輪が出現していました。ケヤキの大木・ムク・シラカシ・ミズキ・イヌシデなどの、木漏れ日の当たる林床です。斜面下側や枯れ枝などを積み上げたところは一部欠けていますが、ほぼ円形に100本ほどのキノコがはえています。なぜか円の中にも、取り残されたようにおなじキノコが3本生えていました(写真中)。

キノコの色は白っぽくうすい茶色です。傘は丸くずんぐりとしたものや平らなものがあり、大きいもので直径10cmぐらいでした



大きいものでは直径10cmを超える、いかにもキノコらしい香りを持つキノコたち



珍しく10mを超える、ハイイロシメジの菌輪の概略図

が、9日後には直径は20cmにもなっていました。いかにもキノコらしい香りがし、柄は下方がふくらんで特徴があります。菌輪の直径は、斜面の上から下の方に12.5m、横方向に11mありました。そこは、ムク・ケヤキ・ミズキ・イヌシデの落ち葉が、5～8cmの厚さに積もっています。

このキノコの名前はなに？

さてこれは、いったいなんというキノコだろうか？ 手持ちの図鑑を開いて見当をつけてはみますが、はっきりしません。そこで、大きく傘を開いたキノコと開ききる前の写真、菌輪の略図を持って千葉中央博物館に吹春俊光さんを訪ねました。その結果、“ハイイロシメジ”と判明しました。それは落葉腐朽菌で、積もった落ち葉を分解して養分を吸収しているそうです。10mを超える菌輪は珍しいとのことで、持参したキノコは凍結乾燥標本にして中央博に保存してくださることになりました。

11月27日、再び菌輪発生場所に行ってみ

ました。すると中央付近に、生えて間もないと思われる小さなハイイロシメジがいくつもありました。前回の観察時には気づかなかったものです。傘の直径は1～2cm、落ち葉からやっと顔を出しています。斜面の下方向にかたまっていてリングにはなっていませんが、直径2mほどの輪の一部に見えます。

こうしてみると、最初に見たとき取り残されたように見えた3個のキノコも中くらいの輪の一部であったかもしれません。外へ外へと大きく広がった菌輪の中に、また新しい菌輪が生まれ広がり、二重三重の輪になることがあるのでしょうか。10mを越す輪、それも二重の輪の中に立ってキノコに取り囲まれるととても楽しい気持ちになり、fairy ringの呼び方がぴったりに思えます。これだけの大きさの菌輪ができるのに、一体どのぐらいの年月がかかったのでしょうか？

今後も fairy ring の経過を観察したい

この場所は昨年までの5年間、誰も立ち入らなかったで、昨年菌輪が見られたのかどうかは分かりません。今年の観察を基にして、来年もぜひ経過を追ってみたいと思います。同じように菌輪が現れたら、再び直径を測ってみたいと思います。一年間で菌糸がどれぐらい広がるのかがわかるでしょう。この菌輪がおおよそ何年かかって今の形になったのかが推測できるのではないのでしょうか。もし来年は現れなかったら、気候や環境の変化や保管理の方法などと照らし合わせて、関係があるかどうかを考えることができるかもしれません。

記録をとり続けることで、ハイイロシメジのフェアリーリングが何かを教えてくれるかもしれないと期待しています。